

2023年5月7日 礼拝メッセージ

「あなたが選んだのではなく、あなたは選ばれた」

牛田匡牧師

聖書 ヨハネによる福音書 15章 12-17 節

一昨日の5日に石川県の能登地方で、震度6強の大きな地震があり、その後も何度も余震が続いていると報じられていました。ゴールデンウィークで各地の観光地が、コロナ禍前のような賑わいを見せている中での地震の報道に驚きましたが、更なる被害が出ないこと、また今もなお不安の中におられる多くの方々が守られることを祈るばかりです。

地震の他にも今週、私が驚かされたニュースとして、先月末の30日に、船橋駅の構内に「サリンをばら撒きます。私は令和の麻原彰晃です」という犯行予告があったということがありました。実際には予告されていたような犯行は実行されませんでした。逮捕された容疑者は25歳の若者でした。今から28年前の1995年に起きた「地下鉄サリン事件」を知らない世代の人が、単に面白がって、大勢の人の興味を引きたくて、そんな犯行声明を出したのでしょうか。28年が過ぎたとはいえ、まだまだ被害者や遺族の方々は、多くおられることと思います。にもかかわらず、オウム真理教による一連の事件は、代表であった麻原彰晃こと松本智津夫や教団幹部らの死刑が執行されたことによって、真相はまさに闇に葬られてしまいました。

25歳の方が、なぜそんなことをしたのか。その背景にあった絶望は、どのようなものだったのか、と想像します。先月15日に岸田首相の演説会場に、爆発物を投げ込んで逮捕された容疑者も24歳でした。もちろん、年齢だけで何かを論じられるわけではありませんが、それぞれに複雑な事情があったとはいえ、それでもこのような事件が続いている背景には、すっかり行き詰ってしまった現代社会の様子が表れているのではないかと思います。

詳しいことは今後、捜査が進むにつれて明らかになって来るかと思いますが、他の事件とも合わせて、彼らが犯行に及ぶ前に、もっと他の道はなかったのか、周りに相談できる人はいなかったのか、などと考えてしまいます。結果から見ると、相談にのってくれて、一緒に現状を変えようと考えて動いてくれる人が誰もいなかっ

たからこそ、それぞれの事件を起こしてしまった、ということなのでしょう。しかし、そのことを含めてそれぞれの人の「努力不足」や、「自業自得」「自己責任」という言葉で、単純に片付けてしまってよいことなのでしょう。「疑心暗鬼を生ず」とはよく言ったもので、「自己責任」などの言葉が幅を利かせるようになってから、ますます社会からはゆとりがなくなり、笑顔がなくなり、生きづらくなって来ているように感じます。そのような現代に生かされている私たちは今、この時代から一体何を求められているのでしょうか。聖書の言葉に聞きたいと思います。

今回の聖書のお話は、いわばイエス様の遺言のようなものとして記されている一連の言葉の一部でした。「ヨハネによる福音書」では、13章からいわゆる「最後の晩餐^{ばんさん}」が始まり、14章の最後で「立て、さあ、ここから出かけよう」(31節)と言った後、再び15章から17章にかけて延々と長いお話をしてから、18章でようやく出掛けて行き、屋外で兵士たちに捕らえられ十字架への道を進んでいきます。そのためにこの15章から17章は、後から書き加えられたと考えられていますが、その内容としてはイエス様が最後に弟子たちに語った「遺言」と言うにふさわしく、重要なことが多く書かれています。

15章の12節には、「私^{わたし}があなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これが私の戒^{いまし}めである」とあります。イエス様とその弟子たちが生きたユダヤ教世界では、「戒め」というと、ヘブライ語聖書に記されている「律法」であり、その要点は突き詰めると「全身全霊で神を愛し、隣人を自分のように愛す」の2つでした(マタイ 22:34-40)。しかし、ここでは前半の「神を愛し」が無くなって、後半の「隣人と互いに愛し合いなさい」のみとなっています。これはイエス様と行動を共にしていた弟子たちが、その言葉と振る舞いをどのように受け止め、理解していたか、そしてそれをどのように伝えてきたかということの変化として読み取ることができます。

即ち、目に見えない「神を愛する」にはどうすればよいか、それは神様との約束を守ること。つまり神様から与えられた律法を守ることだ、と古くから理解されて来ていました。しかし、時代を経るにつれて、神殿祭儀も形骸化し、権力化して来ると、そこに関わることが出来ない人たちも大勢出て来てしまいました。そのような時代

の中で、イエス様は差別され抑圧され、律法を守ることすら出来ない状態に置かれているあなた方にこそ、神様からの恵みがあり、救いがあると、その言葉と行動を通して伝えられました。言い換えれば、「救いのディスカウント」、誰もが実行可能なレベルにまで、大幅な値引きをしたというわけです。それによって罪人として絶望の中に追いやられていた多くの人々が、光を見出し、新しく生きる力を得て、仲間たちと共に生き活きと立ち上がっていきました。

神を大切にすることは、人を大切にしないはずがありません。ですから、「神を愛することは、人を愛する中に含まれる」というわけです（Iヨハネ 4:20-21）。だからこそ「ヨハネによる福音書」では、ヘブライ語聖書の律法に変わる新しい掟、戒めとして、「互いに愛し合いなさい、大切にし合いなさい」のみが記されています。

それは言い換えれば、「私たちは隣にいる人たちとの関わり合いを通して、目には見えない命の神の姿、働きを知ることができる」ということでもあるのだと思います。そしてイエス様は続けて、「私はあなたがたを友と呼んだ」（15）とも言われました。「主人と僕（^{しもべ}奴隷）」という上下関係ではなく、互いに横並びの友であると言うのです。さらに「あなたがたが私を選んだのではない。私があなたがたを選んだ」（16）とも言われています。もしも弟子たちが、自分の力と判断でイエス様を選んだのであれば、福音は力のある者だけを対象とした、ごく一部の人たちだけにしか与えられないものになってしまいます。しかし、イエス様の福音はそうではありませんでした。こちら側の「選ぶ／選ばない」に拘わらず、あちら側・神様の側から一方的に選ばれて、与えられるというのです。

自分の力で選んだのではないから、自分の力を誇る事が無いように。神様から選ばれたと言って、決して^{おご}驕り高ぶる事が無いように。そして隣の人たちと互いに大切にし合いなさい。自分の持っている、自分に与えられている時間と心を使って（13）、互いに大切にし合うこと、あなたにはそれが出来るのだから……。イエス様は、そのように私たちに語りかけられているように思います。

「自己責任」という言葉は、人と人とのつながりを断ち切り、人を孤独と絶望に追いやる暴力です。そして追い詰められた負の感情は、別の暴力となって新たに噴き出して行きます。今を生かされている私たちは、自分の力で生きているのではあ

りません。自分の力で選んだのではなく、命の神から選ばれ、指名され、今この時を生かされています。隣りの人たちと互いに大切にシ合って、共に生きる……。そのためには自分が人を支えるだけではなく、自分も周りの人たちから支えてもらう必要もあります。決して自暴自棄になることなく、自分自身も大切にしながら、だからこそ隣りの人のことも大切に出来る。そのような小さな関係性の輪が、私たちの身近から平和を造り出し、今、ここから神の国を創り出していきます。